

# 琉球大学学術リポジトリ

## 日本語学習者と環境との相互作用に関する一考察 — 3人の学部生の調査から —

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-28 キーワード (Ja): 学習環境, 対人環境, 非対人環境, 相互作用 キーワード (En): learning environment, learner contribution, interaction, individual differences in second-language learning 作成者: 金城, 尚美, 元山, 由美子, 肖, 婿, Kinjo, Naomi, Motoyama, Yumiko, Xiao, Jing メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6787">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6787</a>

## 日本語学習者と環境との相互作用に関する一考察 — 3人の学部生の調査から —

金城尚美・元山由美子・肖婧

### 要 旨

学習者は各自の環境と相互作用を行いながら学んでいるという事実があるのにも関わらず、教師は教室外での学習者と環境の相互作用についてはあまり注意を払ってこなかったことが指摘され(浜田 2004b), 研究が始められている。学習環境は学習者によって異なり、その環境との相互作用も異なるものである。また同じ学習者でも時間の経過や日本語運用力の向上などの変化に伴って相互作用も変化していることが報告されている(浜田 2004c)。本研究では時間の経過や日本語運用力の向上と共に、居住地の移動や身分が変わることによる環境の変化を経験した3人の学習者を対象に、調査を実施した。

調査対象者は国籍、学部生という身分、私費留学生という経済的事情、日本語力などの共通した背景をもっている学習者であったが、対人的な環境、非対人的な環境との相互作用など異なる実態が明らかになった。また調査結果から環境との相互作用に関わる要因が浮かび上がった。

キーワード：学習環境、対人環境、非対人環境、相互作用

### 1. 研究の背景

これまで日本語学習者の多様性<sup>1)</sup>は主として学習者の国籍、学習歴、ニーズといった側面から類型化された集団の問題として捉えられる傾向があった。学習者の1つの属性はその学習者の多様な個性のほんの一側面にすぎず、学習者を属性によって捉える見方は、学習者をステレオタイプに当てはめて理解してしまう危険性がある(浜田 2004a)。そのような危険性を回避し学習者の実態を把握するためには学習者を「個別」の存在とし、一人ひとりの学習過程を丹念に見ていく必要があることが指摘されている(浜田他 2006)。

林(2005:50)が指摘するように「多様な学習者の『学習環境』も、また、多様である。」が、学習者の多様性を生み出す個別性に対応していくには一人ひとりの学習者がどのように環境と相互作用しているのかを探ることが重要である(林 2006a)。

文野 (2004) は、インタラクションを「日本語学習」という枠に当てはめると、意図しなくても起こる偶発的な学習を見過ごすことになってしまうと指摘している。その上で文野等 (2004) は、学習者が相互作用を行う対象を学習環境と規定し、大きく対人環境と非対人環境の2つの枠組みから捉えている。対人環境は人との相互作用をさし、人と会って話す、電話をかける、メールでやりとりをするなど、双方向の言語を用いたコミュニケーションを想定している。また非対人環境は、日本語の教材、テレビ、新聞、辞書などで人以外に相互作用を持つものである。また学習環境とは日本語学校、学校の教室や施設などフォーマルな場面だけではなく、日本語が学べる広い意味での空間を意味している。

本研究では文野等の学習環境の考えに基づき、特に教室外での相互作用に焦点を絞って調査を進めた。対人環境と非対人環境は独立して存在しているのではなく、両環境に同時にアクセスしたり、一方が刺激材料となりもう一方の環境につながったりと複雑に関連しあっていると予想されるが、先行研究にならない本研究では両環境を枠組みとして考察する。また新しい環境への適応の問題もあると推測されるが、本研究では環境 (対人的・非対人的) との相互作用という観点からの考察に留める。

## 2. 先行研究

沖縄在住の外国人については言語学習環境研究グループ (大城他 2005) が調査を行っている。調査対象者は、沖縄県系の日系人留学生、日本国籍を取得した家族や親族など沖縄に生活の拠点を持った学習者、県費留学生など多岐にわたっている。この調査では、沖縄県在住の日本語学習者は沖縄という地域を肯定的に受け止め、沖縄の文化 (芸能や空手、方言など) に興味を持ち、出身国の友人や日本人の友人、知人などと良い人間関係を保ち、沖縄で暮らすために心の支えとなる人的なネットワークを築いていることなどが報告されている。

一方、浜田 (2004c) は、短期留学生の来日直後と帰国前に調査を行い、一定期間を経て学習者と学習環境の相互作用のありようがどのように変化したかを調べた結果を報告している。その調査から、来日当初は既成の同国人ネットワークの中で暮らしているが、時間の経過とともに独自のネットワークを形成するようになること、日本語を使用する割合が増加し、日本語による相互作用が増えていくことなど、日本語力が向上したり滞在期間が長くなったりするにつれ、学習環境との相互作用が変容していることがわかっている。

また浜田他(2006)は、長期間にわたって調査した2人の学習者の事例について学習環境の変化とそれに伴う学習行動や学習認知の変容について報告している。調査の結果、親しい友人が学習行動・学習認知に大きな影響を与えていることなどが明らかにされている。

本研究ではこれまで出身国、世代、身分、私費留学生といった同じ属性・背景を持っていることから、同じ集団に属すると捉えられてきたと判断される文系学部留学生を対象に、教室外での環境との相互作用を調べることにより学習者一人ひとりの学習過程を把握すると共に、環境との相互作用に関わる要因を明らかにすることを目的に調査を実施し、分析した。

### 3. 調査概要

今回の調査は沖縄県内の大学で学ぶ20代の私費学部留学生3人(男性2人、女性1人)を対象に行った。被調査者はアジア圏の同国出身で滞日年数は異なるものの、調査時の日本語力は、3人とも日本語能力試験の1級に合格しているレベルであった(表1)。また私費留学生でアルバイトをしているという経済的状況と、県外での日本語学習経験を持ち、その後沖縄県内の大学(3人のうち2人は同じ大学に所属)に入学して学寮で一人暮らしをしているという点で共通している。このように背景などが類似している学生を調査対象として選定した。

調査は就学生から学部生へと社会文化的環境<sup>2)</sup>が変わると同時に、居住地の移動により生活環境も変わった学習者と環境との相互作用に、どのような変容がみられるのかを明らかにすることを目的に行った。調査方法は個別インタビューの形式で調査者と学習者が一対一で話をしながらメモをし、データをとった<sup>3)</sup>。また面会はその学生の所属する大学のキャンパス内で行い、調査時の会話は本人の許可を得てテープで録音し、面接後に文字起こしを行い分析データとした(表2)。面接後、不明な点などは改めて被調査者に確認を行った。

表1 被調査者の背景情報

被調査者 <sup>4)</sup>	年齢	出身地	滞日年数	同居人・住居		沖縄の大学へ入学した理由	日本語能力試験	アルバイト		将来の目標
				県外	沖縄			県外	沖縄	
1. FR	20代前半	アジア	2年	姉 アパート	無し寮	教師の勧め 学費が安い 自立のため	1級合格	母語教師、 居酒屋	半年：ラーメン 屋 半年：居酒屋	日本語 教師
2. MF	20代前半	アジア	4年	同国出身の 友人 寮	無し寮	学費が安い 都会での生活 が嫌になった	1級合格	飲食店の洗い場、 工場、 レストラン	1年目：なし 2年目： コンビニの レジ	未定
3. MK	20代前半	アジア	4年	同国出身の 友人 アパート	無し寮	学費が安い	1級合格	印刷工場 パン工場	コンビニの レジ	日本の企業 への就職

調査内容は文野等（2004）の研究グループが作成した調査票を基に作成し、主に対人環境（よく接した〔している〕人について）、非対人環境（利用していた〔している〕メディアの種類と頻度）を中心に質問した。また対人環境、非対人環境が日本語の学習や文化の習得と関わっていたかをたずねた。さらに県外と沖縄での生活をそれぞれどのように感じているかを比較してもらうことを目的に、両地域における生活の満足度と学習に対する満足度をパーセンテージで自己評価してもらった。これはそれぞれの評価の判断基準に、環境との相互作用の頻度や関わり方と関係がある要因が含まれると推測されたためである。

表2 調査方法等

被調査者	調査年月日	面接時間数	面接場所	使用言語	備考
1. FR	2005年12月26日	約3時間半	大学内談話コーナー	日本語	面接者とは初対面
2. MF	2005年12月26日	約4時間	大学内談話コーナー	日本語	面接者とは初対面ではないが話すのは初めてである
3. MK	2006年1月3日	約4時間	MKの部屋（学寮）	日本語	面接者とは初対面ではないが話すのは初めてである

#### 4. 調査結果

被調査者ごとに対人環境と非対人環境を中心に述べる。

##### 4-1. FRの対人環境と非対人環境

###### 4-1-1. FRの対人環境

###### 1) 県外

FRの対人環境は表3に示した通りである。FRは先に日本の大学に進学していたお姉さんを頼り、短大の別科で日本語を学ぶために来日し、一緒に住んだ。学校や生活の諸手続きをやってくれた姉のおかげで、何の心配もなく日本での暮らしがスタートした。また甥にあたる男性も同じ地域に住んでおり、気軽に相談に乗ってくれるお兄さんのような存在で、頼りになった。

別科に入学直後、母語を教えるアルバイトを紹介してもらった。生徒は7人で全員年上であった。そのため会話は丁寧な話し方で行い、敬語が身についたと感じている。特にその中の2人とは教室外でも交流があり、自宅に招いてもらったり、観光地へ連れて行ってもらったり、日本での礼儀作法を教えてもらったりするなど、彼らから日本の文化や習慣などを学んだ。

日本語教師を目指すFRは、指導教員に紹介された非常勤講師に大学進学受験に備えるため、毎週日曜日、個人的に勉強をみてもらった。その先生は進学先について助言してくれたり、観光地を案内してくれたり、日本の歴史や文化について教えてくれたりし、日本語力の向上、日本に関する知識の増加という点で重要な役割を果たした人物で、信頼できる存在であった。

日本の生活に慣れた頃に飲食店のホールのアルバイトも始めた。アルバイトを始めた目的の1つは日本語力の向上であったが、仕事で使用する日本語は決まったパターンのためアルバイト先で日本語は上達しなかったと述べている。また、日本人の友人を作ることも目的であったが、忙しくてアルバイト仲間とはゆっくり話したことがなかった。

## 2) 沖縄

一人暮らしを経験してみたいと考えたFRは、姉のいる地域の大学へは行かず、学費が安いということと学習の支援をしてくれた恩師の勧めもあり、沖縄の大学に入学した。沖縄では大学の構内にある寮に住んだ。そのため日本人の同世代の友人ができ、授業で学んだ日本語を使ったり、また友人の会話から、習った日本語を聞いたりすることができ、寮は実践的な日本語を身につけるのにとってもよい環境だと述べている。特に、隣の部屋に住んでいる県外出身の女子学生は年齢が近いので、学校や生活、テレビの番組のことなど何でも話せ、相談事もできる友人である。アルバイトが終わったあとの遅い時間にも、彼女の部屋へ行って話すこともあるそうだ。いつでも会え、心を開いて話せるという安心感が持てる大切な友人である。

友人の1人、同国出身の留学生は、FRとは異なる学部にも所属している女子学生である。FRは同国人の友人が少ないが、彼女とは気が合うため週3回ほど学内で会って学校生活や沖縄のことについて話している。電話やメールでもやり取りをしていて相談ができる唯一の同国人であり、沖縄での生活で精神的な支えになっていると感じている。またFRの日本語の誤りを直してくれ、母語で意味を教えてくれるため、日本語の上達のためには必要な友人であると感じている。

日本人のチューター（沖縄県出身の学部生）も役場へ行ったり、諸手続きの補助をしたりしてくれるなど生活や学習（宿題やレポート作成）の援助をしてくれるので大変助けになっている。またFRの日本語を訂正してくれるため日本語が上達するばかりでなく、沖縄の文化や習慣も教えてくれ、様々な場面で頼れる存在となっている。

アルバイト先の飲食店でも時間がある時は店長も含め職場の人と話すことはできるが、

よく接している人としては挙がらなかった。沖縄では専門の勉強ができ、同年代の友人ができたことで会話力が高まり、留学生として有意義な時間を過ごしていると感じている。

表3 調査対象FRの対人環境

	出身(関係)	年齢	使用言語	①日本語の上達との関わり	②文化に関する知識との関わり	③心の支えになっているか
県外	日本:3人	年上	主に日本語	◎	◎	◎
	同国:2人(姉と甥)	同世代	主に母語	×	○	◎
沖縄	日本:2人(寮の友人とチューター)	同世代	日本語	◎	◎	◎
	外国(友人)	同世代	日本語	△	○	○
	同国(先輩)	同世代	主に母語	△	○	◎

\*①②③の項目に対して、[◎大変ある ○まあまあある △関係ない ×じゃまをする]の4段階の評価

#### 4-1-2. FRの非対人環境

FRの非対人環境は表4に示した通りである。FRは県外ではテレビやビデオ、日本語の教材を主に活用していた。ビデオを繰り返し見ることによって会話力がつき、日本の文化や習慣の知識を得たと述べている。しかし、沖縄に来てからアルバイトで時間的な余裕がないことと部屋にテレビがないことからテレビの視聴時間が減り、日本の小説や漫画などを読むようになった。小説を読むことによって日本語の美しさがわかり、また小説や漫画に出てくる話し言葉によって会話力がついたと述べている。

表4 調査対象FRの非対人環境

	テレビ	ビデオ	新聞	日本語の教材	その他
県外	毎日3~4時間 ニュース、ドラマ	週2~3回 邦画、洋画	日本語と母国語の 2ヶ国語で書かれた新聞	毎日	CD 電子辞書
沖縄	週1時間 決まっていない	見ていない	地方紙	週1~2回	CD、電子辞書、日本の小説、漫画

#### 4-1-3. FRの学習環境についての考察

FRの県外と沖縄での対人環境は大きく変わっている。県外では年上の人と接する機会が多く、沖縄では同世代の友人との接触が主体となっている。そのため、県外では敬語を含めた丁寧な話し方が身につく、沖縄では普通体を使った話し方が身についたという。どちらの話し方も必要だが、沖縄では敬語を使う機会が少なく上手く使えない

くなった点でマイナスだと感じている。相手との関係、年齢によって学習する言葉も異なることがうかがえる。FRは県外でも沖縄でも、家族を含め彼女を支援してくれる人に恵まれ、信頼してつきあえる人の存在があることが特徴と言えるだろう。それが精神的な安定につながり、さらに日本語の学習や文化的な知識の習得にも結びついているようだ。

また、日本語学習を進める上での県外と沖縄での意識の違いは、沖縄では「自分の日本語を直してくれる人が日本語の上達に役立っている」という発言からうかがえる。県外ではまだ初級段階で日本語をインプットすることが中心だったが、日本語力がついた沖縄では、アウトプットした日本語の間違いを訂正する必要性を感じ、またそれをするのが日本語力の向上につながるという学習観を持つようになった。

県外では、FRと同じ別科で学ぶクラスメートと、飲食店のアルバイト仲間との接触は教室内や職場内に留まり、人的ネットワークは形成されていない。これらの結果から、滞日期間や日本語の運用能力、受験生という状況が、環境との相互作用に大きく影響していることがうかがえる。

FRの場合、テレビの視聴から小説や漫画の読みへと学習メディアが変化したのは、所有の有無だけでなく、同居家族の有無がもたらす経済的、時間的なゆとりが原因の1つである。また就学生から学部生になったことにより、学習目標が日本語の習得から日本語教師になるための専門的知識の獲得と変化し、求められる日本語力の違いがもたらしたものだと考えられる。

県外ではアルバイトを通して仕事の厳しさを知り、異国へ来たことを実感したそうだが、沖縄では人間関係における上下関係や仕事に対する厳しさがあまりなく、まるで自国にいるようにリラックスできると述べている。どの地域でも自分の置かれた状況を素直に受け入れる肯定的な姿勢が、対人・非対人環境との相互作用を促していることがうかがえた。

## 4-2. MFの対人環境と非対人環境

### 4-2-1. MFの対人環境

#### 1) 県外

MFの対人環境は表5に示した通りである。来日当初は、県外の日本語学校に通っていた。2人部屋の留学生寮に同国出身の友人と一緒に住んでいた。主に接していたのは同じ中学出身の同級生3人で、その中の1人はルームメートでもあった。彼らとは



ほぼ母語で会話し、一緒に遊んだり、不満を言い合ったりと、気心の知れた仲間であった。そのため日本語の上達にはあまりつながらなかった。友人3人のうち1人はMFより来日が早かったこともあり、日本の文化や習慣について教えてくれた。この3人の友人は日本での心のよりどころとしての存在でもあったようだ。

県外では日本語学校終了後の午後から夜間にかけて2つのアルバイトを掛けもちしていた。MFが「ロボットのような生活だった」と表現しているように、学校とアルバイト先を往復する生活で行動範囲が狭く、学校のクラスメートやアルバイト仲間とのつきあひもない。また、日本人との接触もほとんどない状態であった。

## 2) 沖縄

MFは沖縄に来て、最初の1年はアルバイトをしなかったため、時間にゆとりができ、日本人学生などと接する機会が増え、人的ネットワークが広がっている。

MFが沖縄に来て親しくなった友人の1人は、同国出身の男子留学生である。同じ日本語の授業を受講していたことがきっかけで話をするようになった。ほぼ毎日、どちらかの部屋で話し、会話はほとんど母語だった。MFは自分の考えや意見などを一方的に話し、友人はほとんど聞き役になっていたようだ。MFにとっては自分の話に耳を傾けてくれる唯一の同国人であるため、大変心の支えになっていると述べた。

大学で声をかけられて友達になったのは、同年代の沖縄県出身の男子学生である。週1～2回程度、多いときには週4～5回会って話す。同じ授業を受講していたこともあり、授業の前後に話す機会があった。彼はMFの日本語をチェックし、直してくれたりもするため、彼と接することによって日本語が上達すると感じている。彼はMFの話をよく聞いてくれ、信頼できる存在のようである。

また同じゼミ生の仲間（14～15人）も教室内で週1回だが、専門分野のことや沖縄文化・習慣のことなどいろいろと話せる友人達で、心の支えになっているようだ。生活面でのサポートをしてくれるのは県外出身で学部の先輩のチューターである。彼とはほとんど日本語でのやりとりだが、日本語の習得とはあまり関係ないと感じている。

表5 MFの対人環境

	出身(関係)	年齢	使用言語	①日本語の上達との関わり	②文化に関する知識との関わり	③心の支えになっているか
県外	同国(中学校の同級生)	同世代	主に母語	△	○	○
沖	同国(クラスメート)	同世代	主に母語	△	○	◎
	日本(クラスメート)	同世代	日本語	◎	△	◎
縄	日本(ゼミの仲間)	同世代	日本語	○	○	○
	日本(チューター)	同世代	日本語	△	○	◎

\*①②③の項目に対して、[◎大変 ○まあまあ △関係ない ×じゃまをする]の4段階の評価

#### 4-2-2. MFの非対人環境

MFが県外での生活において日本語を学習するために最も利用したのはテレビである。ドキュメンタリーやスポーツ、ニュース番組に興味があり、毎日1時間程度視聴していた。テレビを通して特に専門的な用語や新しい情報が得られたようだ。また字幕も日本語の学習に役立ったと述べている。一方、沖縄ではテレビを1日2時間程度、視聴するだけでなく、新聞や小説などを読むようになった。特に大学で先生に紹介してもらった小説や新聞などを読み始め、さらに自ら選んだ小説も読みたいと考えるようになった。また、雑誌や日本語の読解用教材にも目を通すようになった。

MFが調査時点で興味がある日本語で書かれた書物として『ライ麦畑でつかまえて』、『森の生活』、『世界が100人の村だったら』の3つを挙げてくれた。日本人と接して日本語を学ぶより本を読むほうが日本語が学べると述べているように、読書によって日本語力が向上したと感じている。また「日本語を勉強するために本を読むのではなく、本を読みたいから日本語を勉強する」と述べているように、MFにとって日本語を学習することは関心がある分野の知識を得るための手段であるという意識を持っている。

県外では、日本人と交流する機会が少なかったため、テレビはストレスを発散したり、寂しさをまぎらわしたりする道具でもあった。しかし、沖縄では大学で日本人学生や留学生、先生と出会い交流する機会が増え、テレビだけでなく、人と接触することや関心を持つ分野の知識を得ることも心の支えになっている、という変化が見られる。

表6 MFの非対人環境

	テレビ	ビデオ	新聞	日本語の教材	その他
県外	毎日1時間 ドキュメンタリー、スポーツ番組、ニュース	見ていない	読まなかった	勉強しなかった	
沖縄	毎日2時間 ドキュメンタリー、スポーツ番組、ニュース	見ていない	地方紙	週2回	インターネット 日本の小説

#### 4-2-3. MFの学習環境についての考察

MFが県外でよく話したり、行動したりする人は全て同国出身者であったことから、母語使用のネットワークに限られていることがわかった。接客のアルバイトをしていたMFは職場で日本人と接する機会がないとは言えないが、相互作用が起こっていない。その理由の1つは学習者の学習動機・態度が関わっていると考えられる。MFはアルバイト先が日本語学習の場とは意識しておらず、自らの置かれた環境を利用し、日本人の友人を作るなどの社会的戦略は使用しなかったと考えられる。もう1つは県外の都市では人間関係が希薄な上、生活リズムが速く、アルバイトを掛けもちしていたMF自身にも時間的余裕がなかったと考えられる。県外でMFが求めていたのは、「一緒に遊べる」、「不満や文句を聞いてもらえる」ようなタイプの友人で気分転換できるような相手が求められていたことがわかった。MFの時間的にゆとりのない生活は、対人環境との相互作用に影響を及ぼしたと言えよう。

一方、沖縄での生活は県外と比べ、時間的なゆとりに大きな違いが現われている。沖縄は県外と比較すると、学費・物価などが安く、生活しやすいためアルバイトをする時間が県外にいる時より減り、時間にゆとりができたのである。また大学に進学したことによって、日本人学生や留学生など同世代の学生と接する機会が増えた。居住地が移動し、就学生から学部生へと変わったことにより、対人環境との相互作用が増えている。このように母語使用ネットワークのみならず、日本語使用のネットワークの構築へと広がりを見せている。また、対人環境に関わるMFの内面的な変化として、求める友人像の変容がある。沖縄ではストレス発散のできる友人ではなく、「自分の考えを理解し、心が通じ合う人」のように質的に変化している。MFは対人環境との相互作用を学習の機会としてでなく、真の友人を得る機会として捉えており、特徴的であると言える。県外では同じ学校のクラスメートとの相互作用はないが、沖縄では同じ授業を受講している同国人や日本人学生との相互作用が起こっていることは、注目すべき点である。

沖縄での生活では非対人環境との相互作用はテレビの視聴だけでなく、小説や新聞などの文字を通じた知識の吸収に意義を見出しており、日本語の学習とも関連していることが観察された。さらに日本語は語学力を向上させるために学んでいるのではなく、情報収集や知識の獲得のために習得しているという意識を持っている点もMFの特徴であると言える。

### 4-3. MKの対人環境と非対人環境

MKは日本語の学習経験がなかったが、自分の夢を探すため来日した。始めの頃はA県の日本語学校に通っていた。約1年後にB県の私立大学に入ったが、学費が高く工面することが困難になり、学費が比較的安い沖縄の大学に再入学した。来日当初、英語が得意だったが、現在では日本人のように日本語が上手になりたいと考えている。

#### 4-3-1. 対人環境

MKの対人環境は表7に示した通りである。

##### 1) 県外 (A県とB県)

MKは県外での生活では、高額な生活費と学費のために長時間のアルバイトを余儀なくされた。アルバイトはほとんど言葉を使う必要のない工場での作業であったため、日本語を学習する動機はあったが、日本語の学習の場にはならなかったようだ。MKは県外では人と接する機会があまりなく、よく一緒に話したり行動したりした人は3人だけであった。

A県では工場の寮に入って知り合った20代の日本人女性とほぼ毎日会って話をした。彼女と話すことが楽しみになり、日本語を学ぶことも楽しくなった。また、彼女と接することによって日本語が上達し、日本の文化や習慣についての知識も大変増えたようだ。心から楽しんで話せる彼女は精神的にも支えになったようである。

A県ではMKの日本語学校とその地域の短大との交流で知り合った女子学生と親しくなった。週1～2回程度、MKの母語による簡単な日常会話を彼女に教え、彼女からは日本語を教えてもらった。彼女はMKの日本語の文法をチェックしたり、直したりしてくれたため、日本語力の向上に役立つと感じた。また、日本の文化や習慣についても教えてくれたため、その知識も彼女を介して増えたようだ。

B県では教会で日本人男性と親しくなった。週1回の教会の集会で話していたが、携帯のメールでやりとりすることもあった。彼は多少MKの母語が話せるため、会話では母語を使うこともあった。彼と接することにより、日本語がまあまあ上手になり、また精神的に心の支えになったようだ。MKも日本語学校のクラスメートとの相互作用は見られなかった。

##### 2) 沖縄

沖縄では、人的ネットワークが県外にいる時と比較して広がっている。アルバイト

の時間の減少により時間的な余裕ができたことで、日本人の学生や留学生と出会い、親しくなる機会が増え、日本語を使用できる機会も増えたようだ。

同じ授業を受講していた沖縄県出身の女子学生とは週2～3回、授業で会って話をするが、携帯メールでもやりとりをしている。彼女は英語も話せることから、会話では多少英語も使っている。話の内容はほとんど専攻分野の専門的なことである。彼女と接することにより、専門的な知識や沖縄の文化についての知識が増え、日本語を学ぶこともできたと感じている。

英語クラスと同級生の日本人学生は、弁論大会に参加したことをきっかけに親しくなった。電話や携帯メールで頻繁にやりとりしている。彼女とのやりとりは全て日本語である。彼女と接することにより、日本で流行しているものや音楽など学業以外のこと、日本語の教科書に載っていないことを知ることができた。そのため日本語力の向上や日本・沖縄文化についての知識が増えるのに役立ったと感じている。彼女との交流で日本での生活を楽しまたいと思うようになった。

アルバイト先の沖縄県出身の女性とは職場以外で会って話す機会はあまりないが、週1回ぐらい携帯メールでやりとりしている。彼女と接することで日本語の上達につながった。また、日本や沖縄の習慣など、より身近な事を熱心に教えてもらい、勉強になると感じている。

同じサークルに所属するアジア出身の先輩の男子学生ともよく話をするようになった。週一回程度、寮で政治や経済について日本語と英語でよく話している。

表7 MKの対人環境

	出身〔関係〕	年齢	使用言語	①日本語の上達との関わり	②文化に関する知識との関わり	③心の支えになっているか
県外	日本（同僚）	同世代	主に日本語	○	○	○
	日本（友人）	同世代	主に日本語	○	○	○
	日本（同じ教会の仲間）	同世代	主に日本語	○	○	○
沖縄	日本（クラスメート1）	同世代	日本語	○	○	○
	日本（クラスメート2）	同世代	日本語	○	○	○
	日本（バイト先の店長）	30代	日本語	○	○	○
	アジア（サークル仲間）	同世代	日英半々	◎	△	△

\*①②③の項目に対して、[◎大変 ○まあまあ △関係ない ×じゃまをする]の4段階の評価である。

#### 4-3-2. MKの非対人環境

テレビは県外では週3回程度、沖縄ではほぼ毎日視聴している（表8）。番組は県外

ではニュースやスポーツの番組を中心に見ていたが、沖縄ではドラマも見ている。テレビの視聴により生活でよく使う表現や役に立つ情報が数多く吸収でき、日本語に対する恐怖心がなくなったと述べている。また、MKにとってテレビの視聴は気分転換にもなっているようだ。

ビデオは県外では週1回程度、邦画を見ていたが、沖縄では週2回程度、洋画、邦画、母国の映画を見ている。映画の言葉(日・英・母語)は耳で聴いているが、字幕スーパーは全て日本語で見ており、字幕を読むことによって日本語が学べたと述べているように、ビデオ視聴は日本語の学習に役に立ったようだ。

ラジオは県外では週2回程度音楽の番組を、沖縄では毎日、ニュースの番組を部屋で聴いている。ラジオを聞くことによって、県外では日本語がまあまあ上手になり、沖縄では大変上手になったと感じている。特に日本語の発音が大変よくなったと述べている。また、ラジオを聞くことによってリラックスできると感じている。

県外では、教科書を中心に勉強することにより、特に日本語の聴き取りや日常会話ができるようになり、日本人とのコミュニケーションがうまく取れることによって精神的に安心できたと述べている。他方、沖縄ではほとんど毎日、母国で買ってきた教科書を使って勉強している。書き言葉はその教科書で学び、自然に難しい文章が書けるようになり、さらに難しい表現も日本語で話せるようになったと感じている。

表8 MKの非対人環境

	テレビ	ビデオ	新聞	日本語の教材	その他
県外	週3回 スポーツ番組、ニュース	週1回 邦画	読まなかった	週4回	ラジオ
沖縄	毎日 スポーツ番組、ニュース、ドラマ	週2回 邦画、洋画 母国の映画	読まない	週5回	ラジオ

#### 4-3-3. MKの学習環境についての考察

興味深いのはMKが挙げてくれた人には同国出身者が1人もいないことである。短時間の調査でMKの性格を完全に把握することができないが、警戒心が強く、積極的に人と接するタイプではないようである。留学中、心の支えとしてもっとも大きいのは「故郷にいる友達と日本人の友達」と答えてくれた。MKは心の中で支えとなる人を求めている一方で、異国で他人、特に同国出身者は信頼ができないという複雑な心境があることがわかった。しかし、沖縄での生活では、そのような複雑な心境に変化が

現われている。「沖縄の人たちは県外の人と比べ、とても優しく感じる。沖縄の人はよく話してくれたり、聞いてくれたりするからだ。」と述べているように、警戒心が強いMKは沖縄の人から声をかけられたり、いろいろ助けてもらったりしているうちに、心を開いていったようである。また、人との交流が学習につながっているだけでなく、生活を楽しもうというように心理面にまで影響している様子が見える。これは大きな変化であると言える。

県外でも沖縄でも、テレビ、ビデオ、ラジオや日本語の教科書を利用し、日本語や日本文化について学習している。県外ではアルバイト以外の時間はほとんどテレビやラジオを通して日本語を学習したようである。しかし、「沖縄と比べると県外では日本語が上手にならなかった」と振り返って述べているように、対人環境との相互作用が日本語の学習に役立つと感じるようになり、ピリーフが変容していることがわかった。

#### 4-4. 生活・学習の満足度(自己評価)

3人の各被調査者の生活および留学の満足度は図1と図2に示すような結果になった。

FRの生活の満足度は、県外では90%で沖縄では50%と県外の方が高い。その理由として精神的・経済的なゆとりの違いが挙げられる。県外ではお姉さんと一緒に住んでいたため、生活に対する不安がなかった。またお姉さんが奨学金をもらっていたため経済的な負担もあまりなく、ゆとりがあった。一方、沖縄では、自立したため生活に関わることを全てやらなければならないという緊張した状態で生活している。また、時給が安いいためアルバイトの時間が長くなり、時間的・精神的な余裕がなくなってしまった。さらに寮よりもアパートの方が設備や部屋の広さなど快適で、交通の便もよく、生活しやすかった。特に沖縄の寮にはクーラーがなく暑いことや、交通が不便であることなどに不満を持っている。

FRの学習の満足度は、県外にいた時期と沖縄のどちらも80%である。県外では大学進学のための日本語の習得を目標とし日本語能力試験の2級に合格、日本留学試験の日本語も高得点を取っており、目標が達成されたことで満足度が高い。一方、沖縄ではアルバイトで思うように勉強に時間が取れないが、就学生の頃とは異なり日本語教師になる目標を達成するために学部で専門的知識が学べることが満足度の高さにつながっている。また生活の場である寮は、授業で習った語彙や表現を使ったり聞いたりすることができるという点で恵まれた環境であると感じている。それぞれの地域で学習目標があり、それを達成できる環境があるという点が、満足度の評価を高めている

と推察される。

MFの生活の満足度と学習の満足度とも県外で10%、沖縄で98%と同じで、両地域の差はかなり開いている。県外での評価が低いのは生活費や学費のため長時間のアルバイトが生活の中心であり、知的好奇心が満たされなかったためである。一方、沖縄では、あこがれていた大学生活が実現し、アルバイトの時間が減ったことにより時間的ゆとりが生まれ、人的ネットワークを広げられたことが評価を高くした要因になっている。また、読書などの知的活動を行うことも可能になったことに大変満足している。

MKの場合、生活の満足度は県外では60%で沖縄では80%と、沖縄のほうが高かった。MKもMFと同様、県外ではほとんど毎日、学校とアルバイト先との往復であったため、人との交流はもちろん日本語の学習の時間が取れなかったことが評価が低くなった主な理由である。一方、沖縄ではアルバイトの時間が短くなり、勉強したり人と付き合ったりする時間ができた。また沖縄の人はよく話をしてくれたり、自分の話を聞いてくれたりして優しいと述べている。時間的な余裕ができたことに加えて、人の温かさや生活のしやすさが沖縄での生活の満足度を高くしていると考えられる。

他方、MKの学習の満足度は、県外では99%、沖縄では80%と県外の方が高くなっている。将来、日本企業への就職を希望しているMKは学部に入学したことで専門的な知識が学べることに満足している。しかしながら、沖縄はアルバイトの種類が少ない上に、専門的な知識や用語など学んだことを使う機会が少ない。このように自分の能力が十分発揮できない点に不満を感じ、沖縄での満足度が県外より低い理由になっている。

学習の満足度は、生活の満足度とは相互関係にあり、切り離せない。生活にゆとりがあること、つまり経済的に余裕があれば、アルバイトに時間がとられることがなく、学業や人との交流、文化・習慣などを習得する時間が持てる。経済的な安定は時間的な余裕を作り、精神的な安定を生み出す。それが生活と学習の満足度につながっていると言えよう。

大城他(2005)では沖縄の地域的な特徴として、地域の文化に慣れ親しむことによって留学生生活を有意義なものとしている学習者がいることが報告されていたが、本調査では学部に入学し専門的な知識が得られること、すなわち、学部生としての学業の日標を達成することに価値観を見出していることがわかった。何を有意義だと感じるか、何に価値観を感じるかは、学習者により、環境により異なり、またそれも変化するものだと言えよう。



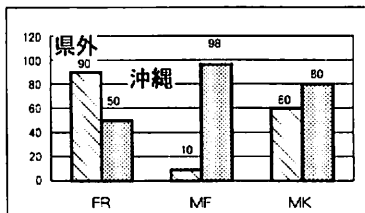


図1 生活の満足度

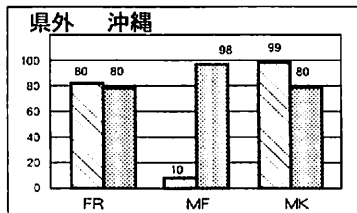


図2 学習の満足度

## 5. 考察

出身国、年齢、身分、経済的状况など同じような背景を持っている学部留学生FR、MF、MKの調査を行った。3人とも来日当初は沖縄県外に在住し、その後大学進学のため沖縄に移動してきたという共通点を持つ。これまでの学習者を捉える枠組みであれば、類似した属性や背景から、学習環境や相互作用など同じ範疇の学習者と捉えられる傾向にあった。しかし、それぞれの対人環境および非対人環境は異なり、その相互作用もさまざまであることが調査から明らかになった。また調査の結果、環境との相互作用に関わる要因が明らかになった。さらに、被調査者の学習の自己管理の様子をうかがい知ることができた。

### 5-1. 学習者と環境との相互作用に関わる要因

#### (1) 経済的・時間的ゆとり

大城他(2006:51)は、安心して学習できることが学習の基盤となっていることを指摘し、「生存に関わる環境がある程度、整っていないければ、対人・非対人環境を構築しながら学習環境を整え、自己実現に向けて自律的に必要な選択をしながら進んでいくというプロセスを辿るのは難しい」と述べている。本調査でも安心して学習できる環境は、環境との相互作用の有無や頻度に影響を及ぼしていることが再確認された。

3人とも経済的な理由でアルバイトをしていたが、労働時間の長短が生活時間のゆとり、学習時間の確保、対人ネットワークの広がりや人とのつきあいの深さ、学習リソースに対する態度や利用度と密接に関係していることがわかった。これはMKがインタビューで「お金があれば、日本語だけでなく日本文化や専門的な知識などいろいろなことが学べる」と話していること、FRが「時間があれば、専門の勉学のみならず、サークルに入るなどしていろいろな経験ができ、文化についての学習もできると思う」と述べていることから裏付けられる事実である。

以上のようなことから、学習者にとって経済的基盤の安定が生み出す時間の余裕が、

環境との相互作用に関わる大きな要因であると言えよう。

## (2) 学習動機

学習者の言語学習に対する動機が、環境との相互作用に大きな影響を与えることが調査から観察された。MFとMKは県外での生活状況は似ているが、環境との相互作用はかなり異なっている。多忙な生活を送っている中で、MKは非対人環境との相互作用が頻繁で、テレビやラジオ、教科書などを学習リソースとして積極的に利用し、日本語学習を行っていた。他方、MFはテレビの視聴は気分転換であり、日本語や日本文化を学習しようという意識は薄かった。これは将来、日本の企業に就職したいという目標を持つMKと比べMFは日本語学習の動機が県外在住時にはあまり高くなかったことが起因している。

しかしMFは大学入学後、知識の獲得に意欲が出てきており、「日本語を学ぶために本を読むのではなく、本を読みたいから日本語を勉強する」と述べているように日本語学習に対する目的意識が変化し、動機が高まっている。それにより、県外では関心なかった新聞や日本語の教材を利用し、読書にも親しむようになっていく。また時間的ゆとりも関係していると考えられるが、テレビの視聴時間も2倍に増えている。このように環境は整っていたとしても動機付けの有無、または動機の高低が学習態度に影響しており、学習動機が環境と相互作用を起こすかどうかに関わる重要な要因の一つになっていると考えられる。

林(2006a)は、第二言語習得過程に関わると見られる要因を学習者要因、学習環境要因、社会文化的要因の三つの要因群に分け、習得過程への関わりを全体像を図示し、学習者要因と学習環境要因は相互に作用しあって、言語習得の過程に影響を及ぼすと説明している。林(前掲)が提示する第二言語学習/習得の個別性モデル図(前掲:52)が示しているように、学習者要因である「動機」と学習者環境要因である「目標言語への接触」が影響しあい、相互に複雑に絡み合っている様子が、本調査からもうかがえる結果となった。

## (3) 学習者自らの働きかけ

FRは他の2人の被調査者と比較し対人環境との相互作用が頻繁で県外・県内とも交友領域が広く、人との接触によって学習する環境を自ら作っている様子がうかがえる。一方、MKは県外では非対人環境との相互作用が主体の生活になっている。これはMKの用心深いという性格的な特性が周囲の人々への働きかけを自ら制限する結果になっていたようだ。特に同国出身者に対する警戒心が強く、母語によるネットワーク

は県外ではほとんど見られなかったことから、交友領域が狭いことがうかがえる。しかし沖縄に居住地を移し地域の人のおおらかさに触れることによって、対人環境との相互作用を活発に行う方向へ心理的な変化が起こり、クラスメート、サークル仲間、アルバイト先の店長など交友関係を持つ相手が増えている。これは学習者自ら対人環境に働きかけた結果、相互作用が生まれ、周囲の人との関係性を築いていくようになったケースと見なすことができる。このように、社会的ネットワークは、ただ存在するだけでなく、学習者個々にとって学習環境として意味づけられていなければならないことを示している (浜田 1999)。

浜田他 (2006) は、学習環境や社会文化的環境から得られた情報を利用して学習行動を決定していく認知活動を「学習認知」と呼んでいる。そして学習認知は、学習行動すなわち環境との相互作用を方向づける際に重要な働きをすると指摘している。MK は県外での生活を振り返り、「沖縄と比べ県外で日本語は上手にならなかった」と述べていることから推察されるように、学習認知が「人との接触が日本語の上達につながる」と変容し、非対人環境と同様に対人環境との相互作用も重視するように変容したと言えよう。

#### (4) 環境からの働きかけ

対人的、非対人的環境が存在しても、当然のことながら学習者自らの働きかけがなければ相互作用は起こらない。しかしながら学習者自らの働きかけだけでなく、環境からの働きかけもなければ、相互作用は起こらないことが調査から明らかになった。例えば FR は語学教師のアルバイト先では生徒と親しい間柄になり、教室外でもつきあえる人ができた。一方、飲食店のホールのアルバイト先でも日本人の友人を作りたいと考えていたが、結局友人と呼べる親しい関係が築けるアルバイト仲間はできなかった。来日初期の段階では、日本語力がまだ乏しいという点で周囲の人からも、学習者に働きかけにくいという可能性もある。しかし FR が学部に入學し、日本語力も上級レベルに達し言語運用力もあるにもかかわらず、沖縄でも飲食店のアルバイト先の仕事仲間とは親しい関係になっていない。これは単に言語の問題だけでないようである。相手側からの働きかけもなければ、相互作用は起こらないことを示していると考えられる。

浜田他 (2006: 73) が、「学習者が『日本語を話す機会を増やす』という目的を持っており、その目的を達成するために『友達をつくりたい』と考えていたとしても、学習環境に適当な相手が見つからなかったり、社会文化的環境が学習者に好意的でなかつ

たりすると、その目的がその通りに実現するとは限らない」と指摘していることを示す結果である。このように、学習者自らの働きかけのみならず、環境からの働きかけも相互作用を生み出す重要な要素の1つと言えるだろう。

また、被調査者は3人とも、県外では日本語のクラスのクラスメートとの相互作用は見られなかった。日本語学習の初期段階では、クラスメートと親しい関係になるには言語の問題があり難しいと予想される。また、日本語学習者が受験生で進学を目指していることや、経済的にアルバイトを余儀なくされているような状況で、お互いに時間的・精神的なゆとりがないことも予想される。このようなことが原因でクラスメートとのつきあいは希薄だった可能性がある。他方、就学生の頃とは異なり学部生になってからは3人とも、クラスメートとの相互作用が起きている。このことから県外でクラスメートとの相互作用が生まれなかった原因として、①学習者自らの働きかけがなかった、②クラスメートからの働きかけがなかった、③双方から働きかけがなかった、という3つの可能性が推測できる。

## 5-2. 学習環境の自己管理

学習者は、学習者が自らの言語運用能力や学習スタイル、ビリーフ、動機などの学習者要因(林 2006a)に合わせて、働きかける環境を選択したり、働きかけの頻度や方法などを調整したりといった学習環境の自己管理を行っていると考えられている。また学習者は、学習環境の自己管理において学習環境を適切に管理することにより、その時点での自らの運用能力にとって最適なインプットを得ることができると考えられる(浜田 1999)。

一方、ネウストプニー(1999)は、言語習得のプロセスを、①教師監督下の習得(一般的に言語教育と言われるもの)、②学習者監督下の習得(言語学習と言われるもの)、③無監督の習得(自動習得、自然習得と言われるもの)の三つに類型化している。現在では、教師監督下の習得よりむしろ、学習者監督下の習得または無監督の習得場面での習得が大きな役割を果たしていると考えられるようになってきた。その考えに基づくなら、教師の監督外のプロセス(ネウストプニー 1995)における環境では、学習の自己管理というストラテジーが重要な要因となると予想される。したがって本調査で観察された学習者と環境との相互作用に関わる要因は、学習の自己管理に影響を及ぼす要因であるとも言える。

浜田(1999)は、学習をプロセスとして捉えた場合、ミクロプロセスとマクロプロ

セスの2つに分けて考える必要性があり、マクロプロセスにおいて習得を促進するために重要な役割を果たすものが学習環境の自己管理であると指摘している。習得のマクロプロセスには、学習者が自らの言語運用能力や学習スタイルに合わせて働きかける環境を選択したり、反対に学習環境の変化に合わせて適切な戦略を採用したりするといった、自らの学習を管理する行動が含まれる。

本調査においても、学習環境の自己管理が観察された。例えばFRの場合、日本語学習を始めた1年目は大学進学を目標に文法、語彙といった言語形式を中心に学び、日本留学試験や日本語能力試験の対策に力を入れていた。また対人環境では、言語や文化の習得を支援してくれる特に年上の人物との交流を活発に行っていた。しかし大学入学後は、同世代の友人を作り話し言葉の習得の重要性に気づき、対人ネットワークを広げている。また就学生だった頃は、教科書を主な学習リソースとして毎日利用していたが、学部生になってからはその利用回数は週に1回程度と減り、それに代わって小説や漫画を読むようになるというように、リソースを変化させている。それは、日本語能力試験1級に合格するレベルにまで日本語力が高まったこと、学習目標が専門的知識の獲得や大学卒業に変わったことも関わっていると考えられる。MFの場合も生活状況の変化や学習目標の変化により対人ネットワークを広げている。またMKも学習認知の変化により、対人環境との相互作用の広がりや深さに変化をもたらしている。

ネウストプニー（1999）は、学習者自らが学習に積極的に関わり、自律的に学習を進めていくためには、学習者監督下において自己管理能力が高いことが求められると述べているが、調査した3人の学習者は環境や状況に応じて、働きかける環境を選択したり、働きかけの頻度や方法を調整したりしていることから、自己管理能力が高いとみなすことができるのではないだろうか。

## 6. おわりに

本研究では、出身、年齢、身分などの背景が同じで、就学生から学部生へと身分が変わり、また居住地の移動を経験した日本語学習者を対象に、学習者と学習環境の相互作用について調査し考察した。調査の結果、学習環境の変化によって、対人環境・非対人環境にも大きな変容が起こっている様子が観察できた。また生活の満足度や留学の満足度の評定に関わる要因も学習者によって異なり、また環境によっても異なることがわかった。同じ属性を持ち、似たような背景や類似した経験を持つ学習者でも、環境との相互作用は三者三様であることが明らかになった。

ある学習者は、学習動機が引き金となり、目標言語との接触、目標言語話者との接触という環境との相互作用に対する態度を変化させる。またある学習者は、居住地の地域性・人間性が内面の性格的な特性に変化を生じさせ、学習態度に影響を及ぼし、対人環境との相互作用を促進する。そのことにより学習認知が変化する。またある学習者は、アルバイトによる労働時間の短縮が時間的なゆとりを生み、対人環境が活発になった結果、自らが求める友人像に影響を与え、さらにそれが学習ストラテジーの選択の要因となる。このように調査から、学習者要因と学習者環境要因が相互に複雑に関与しあい、言語習得のプロセスに関わっていることが確認された。これは、教育の実践において教師は「多くの要因がそれぞれ違った形で関わっている学習者に向き合わなければならない」、つまり、「個々の学習者にかかわる諸要因とそのかかわり合いの全体像に向き合わなければならない」(林 2006a : 55)ということを示唆している。

先行研究が指摘するように、日本語学習の多様性は、学習者の国籍、学習歴、学習目的、ニーズなどの学習者の属性から生じるものでなく、学習者と環境との相互作用から生じるものであることをさらに理解するために、研究を積み重ねていくことが重要であると考えられる。また、一人ひとりの学習に関わる要因とその相互作用はさまざまであり(林 2006a)、要因間の関係性も新たな相互作用を生む要因となっていることが調査結果から明らかになった。その関係性を解き明かしていくことも必要である。また本研究の被調査者である学習者の追跡調査を行い、さらにどのような変容が現われるかを観察することも重要な課題であると考えている。

今回の調査を通して、教室外の環境で誰と、何と相互作用を持ち、どのように学んでいるのかをうかがい知ることができた。日本語学習者を教室の中だけで理解しようとせず、まず一人ひとりの個別性を理解し、教室外での学びにも目を向ける必要があることが再認識された。

## 註

- (1) 日本語教育における「多様性」の捉え方とその変遷については、林(2006b : 5)に詳しい。
- (2) 社会文化的環境とは、例えば学校で児童、生徒、学生として期待される役割など文化や社会の価値観、制度、社会情勢、国際関係、歴史など学習者の社会での位置付けに関わるさまざまな要素が含まれる。(浜田他 2006 : 72)
- (3) 面接調査は1人の被調査者に対し筆者のうち1人が実施した。詳細は表2に示した

通りである。

(4)被調査者を示すアルファベットは実名とは関係なく、任意のものである。

### 引用および参考文献

- 大城朋子・尚真貴子・金城尚美・上原明子 (2006)「日本語学習者の学習環境について：大学で学ぶ学習者の場合」『日本語日本文学研究』第10巻第2号，沖繩国際大学，pp.21-59
- 言語学習研究グループ (2004)『沖繩県在住の日本語学習者の要望調査報告書』平成13年度公益信託宇流麻学術研究助成基金研究助成対象研究成果報告書
- ネウストプニー，J.V. (1995)「場面と学習者ストラテジー」『新しい日本語教育のために』大修館出版，pp.237-268
- ネウストプニー，J.V. (1999)「言語学習と学習ストラテジー」宮崎里司・J.V.ネウストプニー共編『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論に向けて—』くろしお出版，pp.3-21
- 浜田麻里 (1999)「学習者はどのようなストラテジーを使っているか」宮崎里司・J.V.ネウストプニー共編『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論に向けて—』くろしお出版，pp.69-79
- 浜田麻里 (2004a)「研究の理論的枠組み」文野峯子『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，pp.3-10
- 浜田麻里 (2004b)「方法」文野峯子『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，pp.11-16
- 浜田麻里 (2004c)「学習者はどのように相互作用を行っているか」文野峯子『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，pp.17-25
- 浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子 (2006)「第2章 学習環境」『日本語教育の新たな文脈』国立国語研究所，pp.66-100
- 林さと子 (2004)「『非対人環境<テレビ』と相互作用—日本語学習と社会参加—」文野峯子『日本語学習者と環境との相互作用に関する研究』平成15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書，pp.39-46
- 林さと子 (2005)「『学習環境』からみた日本語教育」『月刊言語』vol.34 No.6 大修館書店，pp.50-57

林さと子(2006a)「第二言語習得研究から見た第二言語学習/習得の個別性」『ことばを学ぶ一人ひとりを理解する－第二言語学習と個別性』言語学習の個別性研究グループ(編)津田塾大学言語文化研究所 春風社, pp.47-58

林さと子(2006b)『第二言語学習の個別性要因に関する基礎的研究－社会文化要因を中心として－』平成14～16年度科学研究費補助金基礎研究(C)(2)研究成果報告書

文野峯子(2004)『日本語学習者と環境の相互作用に関する研究』平成13年度～15年度科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書(課題番号13680365)

(金城一琉球大学留学生センター,

元山・肖一琉球大学大学院人文社会科学部研究科修士課程)



**An examination of the interaction between Japanese language learners and their learning environment: Research on three foreign students**

KINJO, Naomi  
MOTOYAMA, Yumiko  
XIAO, Jing

**Keywords:** learning environment, learner contribution, interaction, individual differences in second-language learning

**Abstract**

It is self-evident that language learners interact with their learning environments in the process of learning. However teachers tend to ignore the periods their students spend outside the classroom. The neglect of this area has been the focus of recent research which has indicated that each student's learning environment is unique. The following study seeks to explore this hypothesis by examining three learners who have experienced a change of environment by living in different places and/or changing their social situation. Each shared the same nationality, the status of being self-financing university students and a similar level of Japanese. Yet results of the study indicate that the interaction between each individual's interpersonal environment and non-interpersonal environments were quite different. This indicates that further study of the interaction between learners and the environment outside the classroom is important in developing an understanding of individual learners' language acquisition processes.

(University of the Ryukyus)